

次の学習指導要領を審議してきた中央教育審議会(文部科学相の諮問機関)は30日、中間報告「審議のまとめ」を公表した。主な特徴は、「ゆとり教育」による学力低下を反省し、

小中学校では、主要教科の授業時間を1割以上増やす

現行の指導要領から導入された総合学習の時間を削減する。国際化に対応するため、

小学5年から「外国語(英語)活動」の時間を創設。

「道徳」を教科に格上げすることは見送る。

小・中学校の授業時間が増加するのは30年ぶりで、「ゆとり教育」からの方針転換が明確に打ち出された。

学力低下への批判が相次いだため、今回の中間報告「審議のまとめ」では、「授業時間を減らしすぎた」などと反省。

- 1 全教科での言語力育成
- 2 理数教育重視
- 3 伝統文化に関する教育の充実
- 4 道徳教育の充実
- 5 小学校の英語活動

などの新しい目標に掲げた。

小学校の授業時間は、各学年とも週1、2コマ(1コマ45分)増やし、6年間では現在より278コマ多い計5645コマに。特に増えたのは国語、算数、理科、社会の主要4教科と体育で、中でも、算数と理科はともに16%増となる。また、5年生からは、週1コマが英語活動に充てられることになった。

中学校では各学年とも週1コマ(1コマ50分)、3年間では、現在より105コマ多い計3045コマとした。特に理科と外国語(英語)が増え、3年間の授業時間はともに現在の33%増。英語は、国語、数学などを含め、教科の中で最も授業時間が多くなる。